



414
A 4425



大正十一年四月
大隈侯爵郵寄贈

先般之法何目ニ對シ細大泄スコナク詳密ニ答陳致シ
 至極六ヶ敷コト有ク且故々公認判中日本使節ニ
 ニ應ミテ愛ヲ生スヘク且彼國ニ於テ予ヲ接對スル官
 員ノ生價ニヨリテモ自ツカラ一様ニ相成カタク認判ノ運
 命ニ從ヒ且尙愛化極リナリ必ス首尾同極ニハ至
 難民伸冤一條ヲ清國政府ニ申立以ニハ其仕儀ヲ

一ツヨリ

端ニテ何レノ仕様ヲ了お用ヒ前以テ申陳モシ一々之
ヲ申述イリ卷帙浩翰却テ看ル人ヲ困ラスルニ至ルハリ
歟

大政府ハ先達テ献セシ處ノ四卷ノ費書中ニ繰込スル
方策ヲ既ニ法採用アリテ外務卿大臣ヲ欽差ニ命ジ
北京ニ派遣スルノ事御決着ニ付テハ其出帆前ニ豫
何レノ策ヲ以テ之ニ處スルト委弭件ヲ逐テ約束セシ
ル丁宜シカラス唯政府ノ成畧ヲ行ハシムルニ尤モ十分ナル

権力ヲ具フルヲ要ス是レ成功ヲ保安スルノ道ナリ
因テ茲ニ若陳スル處ニ此一件策略ノ大概ト又此事
件ニ付往昔ヨリノ實跡ヲ述ヘテ之ヲ論スルニ心マルヘシ
書ニヨリテ在上ノ人ニ於テモ使節ノ北京ニ在テ右策略
大概ノ中ニ就テ何レノ策ニ從フヤ自ラ粗之ヲ見玉フ片凡
ハ我之ヲ聽キ大ニ不審ノ体ヲ顯シテ傲慢ニシテ國權ノ及

ト云フヲ怪シムノ意ヲ諭シ清國臣行ノ請書ニ對テ其言非
ナルヲ證スヘシ臺灣志武切紀成等ノ書ニ臺灣生蕃ノ
地ハ其屬地ニ非ル由ヲ述ヘ又支那官板ナル續紳全書ニ帝
國中地方官ノ姓名ヲ泄サス書載セシ物ナルハ書中ニ未タ
生蕃ノ地ハ派遣セル一ノ士官ノ姓名記載シアルヲ見ス
皆原公ニ據テ
又清時厦門英國領事ノ卓其得ト約ヲ結ビ之ヲ公ニ
告タル書翰ノ意ヲモ彼ニ示シテ言ノ非ナルヲ証スヘシ右書
翰ノ中ニ臺灣ノ鎮臺が實ニ改權ノ生蕃ニ及ハサル類

（五）ハタリ其語ニ云ハク

米清兩國ノ條約第十一條第十三條ニ云ヘラリ支那帝國
中ニ於テ米國民損害ヲ蒙ル丁アラハ文武官員ニテカク忍
フタケハ其兇徒ヲ罰スヘシトアリ然レモ米國ローナルノ船ノ水
手ノ損害ヲ蒙リシハ支那帝國中ノ土地ニ非ス實ニ生蕃ノ
有セル土地ニ於テセリ故ニ條約面ニ據リテ伸究テ我政府
ニ訴フルヲ得ス且我政府ニテ米船ノ水手ヲ害セシ兇徒ヲ
罰スルノ力アラシ素ヨリ外國トノ親睦ヲ厚フスル所以

ナレ必ラス悦ニテ之ヲナスヘシ然レ所生蕃ノ地我帝國ノ權
外ニアル故カラ之ニ及ハスト

又廈門ノ領事ノ言ニ支那政府ニ此後テ兵隊ヲ生蕃ノ

地ニ送りタレト

六十七年
九月十日

之レ前ノ意ヲ要ミテカリナシタルニ

非ルヘシ唯米國ト和平ノ誼ヲ表スルタメノミナリシ又或ハ

支那兵ヲ送ラスニハ米國或ハ他ノ外國ヨリ其兵隊ヲ送ル

アラシ此不都合ヲ生セシヨリ好マサル故ナルヘシ

又云此兵隊ヲ送リシハ唯米國領事カ生蕃ノ畧ヲ查

問ニ又其地彼ノ要務ヲ彼ノ地ニテ辨スル為ニ清國ヨリ此

兵隊ヲ送り以テ勸ガ形容ヲ繕フマテ也其地ニ此滯陳中

令衆國政府ニ其領事ヲ經テ其欲スル所ノ事務悉クナシ

果テタルニ支那兵隊ハ一事モナサス唯之ヲ傍看セルノミナリシ又

兵隊既ニ退去セントスル片ニ卓トキトク其篤ト約ヲ結ビシハ獨リ米國

領事ニシテ支那兵ノ隊長之ニ共カルコトナカリシナリ

六十八年
九月

マテック
コレス
ホンテ
ニス
五百
五葉
ヨリ
五百
十葉
ヲ見
ルヘシ

此約成リシ片米國政府及ヒ臺灣ノ屬セル福建總督及ヒ

小京在苗英公侯等より之ヲ普ク世ニ公告セリ

福建總督ノ公告スル書中ニ米國領事ノ此約ヲ成スヤ清
國教テ共ラス此レ各其義ヲ守ル所以ナリト其書中ノ詞ニ
合衆國領事生蕃トキトクト約ヲ結ヘリ其約書ノ中ニ
向所外國船困難ノ時ニ方リテ用ユヘキ旗章ヲ示セリ生
蕃等外國ノ國船形ニ此旗ヲ挿スアルヲ見シハ必ス其
ノ扶助ヲナサン然レモ外國ノ船舶ヨリ事ナキニ徒ツラニ上
陸スル者アラハ萬一難ヲ受ルモ生蕃ノ酋長其責ニ任

シ難ニト

此福建總督公告書ニ米國政府ヨリハ各國ノ新聞紙ニ載
セテ普ク通知セシメ又英公侯之ヲ清國諸港在苗ノ英領事
ニ公告セリ

米國領事ノ生蕃ニ入ルヤ支那兵ノ隊長リユー氏同行セシニ
前文總督ノ書中ニ更ニ此リユー氏ノコトヲ述ヘス此何故ソヤ
モシ清國政府權ノ生蕃ニ及フアラハ約ハ領事ノ手ニナラスニテリ
ユー氏ノ手ニ成ルニキモナリ殊ニ其時兵權ヲ其手ニ握レリ豈ノ

ラサルヲ憂ニク此約ハ六十七年十月ニ成レリ而シテ六十九年
二月ニ於テ右領事及「トキトリ」ニテ此約ヲ更ニ改正セラレシニ
支那士官又之ニ異カラス此改正ノ約書左ノ如シ

合衆國ノ厦門臺灣等所ニ住セル領事ニヤレス。トツ

ブリュッリジヤンドル此書ヲ以テ千八百六十七年ニ於テ十八番

種ノ酋長「トキトリ」結ヒシ約定ノ覺書トシテ之ニ署名ハ

ト云々

此書ニ兩人ノ保証アリ一ハ其時領事館ノ通譯人ナリシ「ピクリン

此「ピクリン」氏ハ
今北京ニ在リテ
高宮トナレリ

氏又一ハ「マン」氏ト云ヘル清國士官ニテ此人自カラ臺灣南地ノ

稅務ノ長也トイヘリ 六十九年コムメルシヤルリ
レ「ピクリン」ヲ見ルヘシ モシ清國政府果シテ

生蕃ノ地ニ權アラハ タカオ
臺灣南地ノ
一港ノ名 稅務長ナルモ此書

保証ノ印ハナサルヘシ如何トナレハ此書中ニ清國政府ヲサシ置テ

別人ニ君權ヲ與ハタレハナリモシ稅務長ノ過ツテ此保証ノ印ヲ

ナシタルナラハ清國政府其旨布告セアルヘキニ敢テ其事モナカリ

ミナリ

兵隊長リ「ニー」氏ノ臺灣ノ地ニアルヤ采國領事宛回カ之ニ勸メテ

堡基ヲ此地ニ構ヘテ兵備ヲナサントテ試ミ但カミタリ彼云ヘラ

北京政府ノ命ナクシテ堡ヲ築クノ能ハスト竟ニ僅ニ土築ノ砲

臺ヲ島ノ南西岸ニ築キタリ 六十八年六十九年ノ合衆國デイプロマテイ内ワコ
リスボンデニス五百五葉ヨリ五百十葉ヲ見ルヘシ

然カルニ此後北京政府ニテハ一時ノ砲臺モ久持ノ砲臺モ更ニ造ラ

命セシメナリ且此泥造ノ砲臺モ亦壞サレ砲類モ何レヘカ持去テ

見ヘス 六十九年コムソルミヤルリレー
シユンヲ見ルヘシ

前条々數件及最前ノ覺書中ニ云ヘルニ因テ之ヲミルニ支那

政府ハ唯高山ノ西手平原ノ地ニ於テノニ改權アルヲ明カナリ

而シテ甚高山ニ住セル人民ハ皆獨立ノ生蕃ナリ故ニ日本

ニテモ六十七年ニ於テノ米國ト同シク直チニ此生民ト引合

フノ好ナシ改ニ米國提督ベール氏ノ彼地ニ至リシキモ

那ニテ少シモ故障ヲ云ヒシコトナシ 六十七年合衆國海軍卿ノ
申立書五十四葉五十五葉ヲ見

提督ベール氏ノ彼地ニ在ルキ其土地ノ清國政府ニ隸セサル

ヲ實知セリ 六十七年及六十八年ノデイプロマテック
マリスボンデニス五百七葉ヲミルヘシ

支那政府前文ニ據論ニヨリテ我國生蕃ノ地ニ權ナシト

云々左ノ通り之レニ答ヘシ

然則我ニ於テ先年米國ヨリナセシ先例ニ因リ直チニ生
番ト列合ノ處分ニ及ベシ然ルニ島ノ東南部ニハ我船舶
ヲ寄スヘキ良港ナシ因テ望ムラクハ貴領中西北部ニ於テ
我カ人数ヲ揚陸シ要品ヲ貯存スヘキ一地ヲ借典ヘラレシ
ラ抑ルノ政府現下臺灣三分ノ一ヲ占ム而シテ二百年前ヨリ
此三分ノ二ノ土地ニ住スル生番等屢煩勞ヲ醸シ貴國ノ後民等
仇スル止ムナシ此後外國ノ人ヲモ殺害スルヲ往々アルヘシ彼等外人ヲ

殺害スルヲアラハ貴國ト外國トノ間ニ忽チ煩難起ラシト必然ナリ六
十七年米國ローウル船ノ一件ノ如キ則是ナリ其時米國政府ニ
テハ島ノ東岸ニ於テ海軍ノ屯集所ヲモ設ケシト易カラシニ同
國ハ此舉ヲナサハリシナリ此後万一同様ノ事興リテ其國
ヨリ生蕃ノ地ニ兵隊ヲ屯集セシムルヲアラハ貴國宜之ヲ悦
ヤ
六十七年六十八年谷衆國アイプロマテッキコレスホシテニス
四百九十八葉及五百〇七葉ヲ見ヨ
ト一見ハルウイ
千ヤイナ百三十八葉三十九葉
四十葉ヲ參看スヘシ
事勢如此ナリ因テ今度我國ヨリ此地ニ生蕃ノ地ヲ
サシテゾフ 據リテ人種ヲ

移殖セシコトヲ決定セリ日本人ハ貴國人ト同シク亜細亞一洲中ノ人
 ニテ俱ニ同文ノ國柄ナレハ貴國ニ於テ決テ心遣ヒ介隔ノ意アルハ
 カラス我ヨリモ又急度心ヲ盡シテ我ノ間ノ煩難ヲ避クベシ此
 儀毫モ懸念アルハカラス而シテ生蕃ハ平時ニ於テモ戦時ニ於テモ之ト
 接スル甚ク難シ米國ノ提督ベル氏モ曾テ彼等ヲ目シテ其狡猾ナルコト
 ヨルダヤ邦ニ任セシ印度人ニ似タリト云ヒコトアリ 合衆國海軍省ノ申立書五十五
 葉ヲ見ヨ
 サテ臺灣ニ赴カシニハゴント。ベニヨスキー 人カ千七百七一年第八月廿六日ニ
 名 彼島ニ至リシ時ノ仕方ニ從フヘシ而シテ「ベニヨスキー」ハ一港ニ兵ヲ揚ケメレド

今度ハ亦ノ港ノ一ニ時兵ヲ揚陸サスヘシ又「ベニヨスキー」ハ僅カニ一艘ノ
 小艇アリテ乗組人數モ多カラス而シテ尚一部落ヲ占住スルコトヲ得タリ其
 勢モシ歐洲ヨリ之ヲ助クルアリセハ猶發禁茶ヲ増タラシム必セリ日本ハ現
 下富饒ニシテ且海軍モ富タレハ彼地ノ諸所ニ殖民ヲ置クコトニ於テ何
 ノ欽重カ之レアラシ因テ「ベニヨスキー」カ為セシゴトク彼地ニ數千ノ兵卒ヲ
 揚ケ置キ次ニ數多ノ高旅ヲ貴國領ノ開港場ニ送り往來切手ヲ
 得テ生蕃ノ地ニ赴カシメントス 五十八年英日天津條約及ヒ五十八年
 第十一月上海章程ヲモ見ル
 此等ノ高旅ニ追々生蕃ノ地ニ赴キ彼等ト貿易ノ因ミテ結ヒ之ト

交ワテシテ「ハツカス」人ノ既ニ行ヘル如クスヘシ又生蕃ノ地ニ住居セシ高
旅等ノ人彼等ニ耕耘職藝ノ道ヲ教ヘナク之ヲ同化ヲ進ル一
大助カトナルヘシ萬一彼等冥頑ニミテ我民ヲ虐テ害ヲナサハ
我屯苗セシムル所ノ兵卒忽ケ来ツテ之ヲ救ヒ或ハ復讎ヲモ
成スヘシ

日本政府如斯ク一生蕃ト干戈ヲ起スコトアラハ支那
政府ハ條約ノ規律ヲ守リ生蕃ノ去ツテ去ル
額ニカクルヲ許ルサハルコト 我カ疑タガ

ハサル處ナリ支那政府ニテ此規條ヲ守ラズ生
蕃ノ其地ニ侵ルヲ許スアハ日本支那有ル心士官
ノ事ヲ議シ信モ先ニテテョーチヤ邦ノホノ合衆
ニ合併セサリシハ合衆國ノ大將ジャクソン氏兵ヲ引
テ印人ヲ心セントセシニ印人カタス西陲ノ領
近ヘリシハ西國ニ至地防備ヲ固クシラる外中ノ
互ノ規條ヲ守ルニ能クシテ若氏兵ヲ引テ西ノ地ニ
至他處ニ於テ據有セシテアリ思フニ此後モ又西陲

牙士官ト合衆國士官ト同ニ生セシムル如ク受テ引
出スヘシ

サテ西班牙ト合衆國ハ比タニ留テ居ル者ハ頻
勞難シク殊ニ西班牙人即チ人ヲ防カシタリ候事ハ三ツ
達成ニ備ヘテ外中五ノ規則ヲ定ムルトスルモ不費
巨額ニテ此地ヲ西班牙ニ存トシ置ルヲ納メテ
至費夥シク是ニ以テ合衆國ニ讓ルコト決意セリ

合衆國ノテラトヘテル英四卷四百九十九條日ヲオレシリトニニテハるニテ四斗ニテト
オニスヨリ國務ノニ贈ルニ才籍及至衆國ト西班牙國トノ間

ニ取結ビシ和親居留地及國強ノ条約第一條ヲ見ルヘシ此条
約ハ合衆國スタキユートアトラシカハ卷二百五十兼ニテリ
シヨールシヤ邦ハ兩國爭競ノ間久シク荒廢ニ属シ更ニ利益
ノ至スル道モナカリシニ合衆國ニ讓與セシ後ハ其嚴正ノ規則ニ
ヨツテ百事興起シ竟ニ豊富ノ一邦トナリタリサテ支那政府
ニテ前条ヲ熟考アリテ臺灣ノ為ニ種々煩テ好マヌ
ニタ其地ノ緊要ナラサルヲ思ヒ因テ臺灣西部ノ地
ヲ日本ニ賣與スルノ催シアラハズニ幸甚ノ
至リナルヘシ又其上ニ尚オ一理アリ支那日本ハ

昔ヨリ常ニ平和ノ交リアリ然シテ臺灣ヲ日本ニ
譲ルニ於テハ清國一ツノ強盛ニシテ且局外ニアル友
國ヲ其南西ノ近傍ニ得ルナリモシ清政府此儀ヲ用ヒ
ハ之ニ千八百六十三年間ニ佛朗西國ノルイジヤナラ米國ニ
譲ツリシ成例ニ從フナリ

佛國ノ此地ヲ米ニ譲リシ策ハ米ニ強大ノ勢ヲ付シテ英ノ
強勢ニ對揚セシメ而シテ英ノ獨リ至強ナル勢ヲ殺クニ在リ

千九百一十一年ノラージオハ卷外國條約
オニ百條ヨリ二百六條ヲミルヘシ又四ヶ年前ニ魯國ヨリ

魯西亜西米利カノ地ヲ米國ニ譲リシモ亦案ノ條ト
曰理ナリ

若清國ニテ臺灣ヲ日本ニ奪ルモ譲ルモ好ク其時ハ
日本ヨリハ種クニ是レ中々ノ友誼ヲ以テ之ニ由リテ
ハ之ヲ院人教宮一併ヲ奪ハルル事ニシテ我京
ヲ七卷灣ニ揚陸セシメントス此カ爲メ一港ヲ以テ船艦
ノ爲メ大凡ヲ遊ク或ハ海軍物産ヲ以テナクニテ
此カ爲メ澎湖一島ヲ良シトス其カ曰路ハ是レ也

高貴ノ地ニ非ス貴國ニ在リテ家ヲ立テ田ヲ作シ而シテ
我國ノ為ニ橋ヲ架ケ海國ヲ通シテ代リテ治東
我等志海ノ東部ニ在ラハ正シク政權ヲ創シ
シ開化ヲ布キ貴國ノ利ヲ為トスルニ特ニ
足清國志海ノ東部ニ在リテ家ヲ立テ田ヲ作シ而シテ
我等志海ノ東部ニ在ラハ正シク政權ヲ創シ
シ開化ヲ布キ貴國ノ利ヲ為トスルニ特ニ
足清國志海ノ東部ニ在リテ家ヲ立テ田ヲ作シ而シテ
我等志海ノ東部ニ在ラハ正シク政權ヲ創シ
シ開化ヲ布キ貴國ノ利ヲ為トスルニ特ニ

止メ生蕃等ヲ開化ニ赴カシメテ既ニ前ニ言ヘルカ
ニモ亦其那西府ニテ之ヲ得スルノ用意アリト云ハ
我ヨリハ其他クセシヤ否願ル之ヲ務メテ述ヘ
ニ我邦ニハ既ニ十分ノ軍勢用意アレハ直ニ之ヲ臺
灣ニ送り清國ノ為サニ様ヲ立合見分メシト云ハ
モシク何レモ之ヲ否マハ我之ヲ告テ云ハニ是マテ
我邦ヨリ平和有睦ノ情ヲ以貴國ニ對シ我從

民ノタメ寛ヲ伸フルノ一件モ可成ト平穩ニ談判
セント心ヲ碎キ廻ヲ尽シタトモ貴國一ノ是ヲ吾メ
リ我心思不快ニ括想フ日本全國ノ思フ所ヲモ
ミナシレニ因シカラニ隨予輩今は都府ヲ返リ
トス以後如何之所分ヲ為サカ都テ我邦ノ意ニ任セ
トス
結束ニ

茲ニ注意ヲ致ス儀ハ使節者達ノ有
十分ノ權ト信任ヲ表シタル信憑ノ國書ヲ

使節ニ附與アリタク且亦隨行ノ書記官
譯官附屬官ニ至ルマテ十分ノ負ヲ備ヘ夫
々ノ職事ヲ司ラシメ且使節ハ不及申屬官
ニモ十分ノ手當金等ヲ附與シテ行粧ヲ
整ヘ北京政府ニ對シテ各不倖ニ對シ無
之様イタシ度モシ此等ノ事一々不相整
然テハタトへ好機會ヲ得ルコトニルトモ使節
其實地ニ方ツテ是ヲ起シ談判成就

難致亦使節若途以海陸軍ノ用意ヲ
整へ使節談判ノ都合ニ寄リ臺灣ヲ日本ニ
譲與スル時ニ至テハ速ニ途ニテ之ヲ請取ル為
ニ備フヘシモ亦清國ニテ此島ヲ讓レモナシ
亦生番ヲ討スルコトヲモ急ラハ直テニ此島ヲ途
メテ生番ヲ討スヘシ萬一清國我意ニ一モ聞
クコトクニハ此島ハ我國權ヲ維持スル為ノ用
意ニ充ツヘシ

